

平家物語と和歌

大 洋 和 俊

一 和歌と流離

平家物語には今様を含めて百首ほどの和歌がある。源氏物語が七九五首の和歌を有し、物語が成立しえないほどに和歌が重要な位置を占める事に比べれば、平家物語と和歌との結びつきはゆるやかなように思われる。

しかし、平家物語の中で和歌はどのように扱われているか、を考えると興味深い点がある。「鱸」(巻一)の章段では清盛の父、忠盛と女房の和歌が二首記され、女房は歌道に深く心寄せる忠度の母である。また「祇王」(巻第一)は清盛に捨てられ、清盛邸の障子に和歌を一首書きつけて去る。そして、のちに「仏もむかしは凡夫なり 我等も終には仏なり いづれも仏性具せる身を へだつるのみこそかなしけれ」⁽¹⁾と今様ひとつを二度繰り返して、平家一門の人びとの涙をさそう。この祇王はやがて嵯峨の奥に母、妹とともに「一向専修に念仏して、ひとへに後世をぞねがひける」仕儀を経て、「昔往生の善懷をとげけるとぞ聞えし」と書かれる。芸能の徒で歌のみならず、舞をよくする祇王、妹、その母ならびに同じ技芸を持つ仏御前も出家、往生で章段が締めくくられる仕儀は、出家、往生への願いと実践を繰り返して語る平家物語の構想に合致するものであろう。

また、「二代后」(巻第一)では二代の帝に仕えた多子の和歌二首を載せる。

うきふしにしづみもやらでかは竹の世にためしなき名をやながさん

おもひきやうき身ながらにめぐりきておなじ雲井の月を見むとは

二代の帝に仕える「栄誉」にありながら、和歌は「うき」(浮き、憂き)の言葉に導かれながら、このような境遇を嘆く和歌となっている。宮中を示す「雲井」の月を悲傷の心で眺める。和歌は今上天皇の傍にありながら先帝を恋しく思う多子の揺らめく心情を象って、今上天皇の言葉、「天子に父母なし。吾十善の戒行によって、万乗の宝位をたもつ。是程の事、などが勅慮に任せざるべき」を相対化させるものであろう。「雲井」(宮中)の月を見ることが嘆きの因となる多子の和歌は平氏の西海流離を描く「緒環」⁽²⁾(巻第八)に、

九月十三夜は名をえたる月なれども、其夜は宮を思ひ出づる涙に、我からくもりてさやかならず、九重の雲のうへ、久方の月に思ひをのべしたぐひも、今の様におぼえて、薩摩守忠教、
月を見しこそこのよひの友のみや宮にわれをおもひいづらむ

と記される忠教和歌の世界に同調してゆくものであろう。「月」の歌語を核として宮中に在った時の友に心が結ばれてゆくのである。

「雲井の月」は、天皇との絆(二代后)、西海流離の平氏の人々の心を刺激し続ける景物として

平家物語の中にとり置かれている。

和歌は出家往生、流離の悲劇という物語の主題、構想と分かちがたく結ばれていることを右に掲げた諸章段、「祇王」、「二代后」、「緒環」は示しているのだが、「雲井の月」は平家物語の始発に置いて登場していた。先にも触れた「鱸」(巻第一)の章段がそれである。この章段は題名が示すとおり、平氏繁盛の因を熊野権現の利生として、大きな鱸が清盛の船に躍り入ったことを主眼とするものであるが、章段の始発は清盛の父、忠盛と最愛の女房の「月」をめぐる和歌の世界であることに注意したい。

二 歌語「明石の浦」

其子どもは、語衛^{あの}の佐になる。昇殿^{しやうでん}せしに、殿上^{てんじやう}のまじはり人を人嫌ふに及ばず。其比忠盛、備前^{びぜん}国より、都へのほりたりけるに、鳥羽^{とば}院、「明石浦はいかに」と、御尋^{おんたづね}ありければ、

- ① 有明^{あかりけ}の月も明石のうら風に浪ばかりこそよるとみえしか
と申たりければ、御感^{おんかん}ありけり。此歌は、金葉集^{この}にぞ入れける。

(巻第一、鱸^{すしめ})

鳥羽院の下問に備前守であつた忠盛が答えた和歌は「有明」、「明石」、「うら風」、「浪」、「よる」(寄、夜)という具合に、王朝和歌の伝統的作り方、すなわち歌枕を縁語と懸詞の連鎖により一首を生成するものであつた。ちなみに、明石の和歌史を示せば、

天離^{あまな}る鄙^{ひな}の長道^{ながみち}ゆ恋^{こひ}ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

(万葉集、巻第三、二五八⁽²⁾)

はのぼのとあかしの浦の朝霧に鳥がくれゆく舟をしぞ思ふ

(古今和歌集、巻第九、四〇九⁽³⁾)

とあり、源氏物語にも

ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうらさびしさを

(源氏物語、明石⁽⁴⁾)

旅衣^{たらいも}うらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすばず

(源氏物語、明石⁽⁵⁾)

嘆きつつあかしのうらに朝霧のたつやと人を思ひやるかな

(源氏物語、明石⁽⁶⁾)

のように、明石の浦は詠みこまれている。そして平家物語にも次のように叙述されている。

- ② 同十四日、九郎大夫判官義経、平氏男女のいけとりどもあひ具してのほりけるが、播磨^{はりま}国、明石浦^{あかしうら}にぞつきにける。名をえたる浦^べなれば、ふけゆくまゝに月さえのほり、秋の空にもおとらず。女屋達さしつとひて、「一とせこれをとほりしには、かゝるべしとは思はざりき」など言ひて、しのびねになきあはれけり。師のすけ殿、つくづく月をながめ給ひ、いと思ひ残す

事もおはせざりければ、涙にとこもつくばかりにて、かうぞ思ひつゞけ給ふ。

ながむればぬるゝたもとにやどりけり月よ雲井のものがたりせよ

雲のうへに見しにかはらぬ月かげのすむにつけてもものぞかなしき

大納言佐殿

我身こそあかしの浦にたびねせめおなじ浪にもやどる月かな

(巻第十一、内侍所都人)

- ③ さて武士共にとらはれて、のほりさふらひし時、播磨国明石浦について、ちつとうちまどろみてさふらひし夢に、昔の内裏には、はるかにまさりたる所に、先帝をはじめ奉て、一門の公卿・殿上人みなゆゑ、しげなる礼儀にて侍ひしを、都を出て後、かゝる所はいまだ見ざりつるに、「是はいづくぞ」ととひ侍ひしかば、式位の尼と覚て、「竜宮城」と参侍ひし時、「めでたかりける所かな。是には苦はなきか」ととひさぶらひしかば、「竜宮経のなかに見えて侍らふ。よくく後世をとふらひ給へ」と申すと覺えて夢さめぬ。

(灌頂巻、六道之沙汰)

歌枕である明石は、鳥羽院の下間に忠盛が答えた折り(①)には、先に述べたように王朝和歌の技法を踏襲しており、それは伊勢国という辺境の地に永く住みついていた平氏が和歌の作法に習熟していることを鳥羽院の前で言上し、感心されることで貴族伝統の和歌文化の仲間入りを果たしたことを示すものであった。忠盛は和歌によって殿上人たちの嘲笑(「殿上園討」)を払いのけたばかりか、和歌と鳥羽院の御感によって貴族文化圏の一員として認知された。その意味で忠盛の和歌は、院政と深く結ばれていたともいえよう。

このように忠盛の和歌は平氏の栄達を和歌によって象徴的に眼前化したものであったが、源義経に捕らわれ、平氏一門が播磨国、明石を通過する時には全く別の様相を示すこととなる(②)。月の名所として名高い明石の月は、壇浦で平氏一門の人々は多数死んだ事件を踏まえ、雲井(宮中)で栄華を誇った平氏を涙ながらに懐旧する悲傷の場に転じている。また二首目の和歌「雲のうへに」が示すように、月は雲上(宮中)と呼び合いながら、都在住の折りとは変わり果てた平氏の没落を澄みわたる光によって照らし出すものとなつていよう。大納言佐殿、重衡の北の方が「おなじ浪にもやどる月かな」と詠じ、義経に「さこそ物がなうゝ、昔恋しうもおはしけめ」と深い同情を寄せられたように、明石の浦は和歌の名所として詠みこまれること以上に、没落し、無惨なわが身を宿し、月は、捕らわれの身となって漂泊する自分の境遇そのものであった。明石の浦、浪、月を詠んだ大納言佐殿の三首目の和歌は「鱸」(巻第一)の忠盛の和歌と「月」、「明石の浦」、「浪」というように明石の歌ことが帯びる自然詠、美的な叙景歌、報告詠の世界から一転して、同じ言葉を使用しながら、無残に敗れ、平氏の人々を多く喪失した悲劇を回想するばかりか、我が身の境涯を象る「場所」へと転位したのである。

さらに、灌頂巻で建礼門院が夢の中で死者となつた先帝はじめ一門の人々を見る場所として明石は叙述される(③)。いわば、死者が夢を通してこの世に再現する境界が明石であった。この世と

あの世、日常と非日常としての夢、明石は幾内と幾外の境界であり、平氏の人々の出家、往生に関わる重要な地として「菟宮城」の語が答として用意されている⁽²⁾。

こうして、明石を媒介としての月、雲居（宮中）は、「鱸」（巻第一）で忠盛詠に続いて彼の最愛の女房の和歌を呼び入れてくる。先の忠盛の和歌説話に続く文章を引く。

二 忠盛と忠教をめぐる和歌

忠盛^{また}、仙洞^{せんどう}に最愛の女房を持つて通はれるが、ある時、其の女房のつばねに、妻に月出^{いづ}したる扇を忘れて出^いられたりければ、かたへの女房たち、「是^{これ}はいづくよりの月影ぞや。出^いどころおぼつかなし」など、わらひあはれければ、彼女房、

雲井^{くもい}よりたゞもりきたる月なればおほろけにては言はじと思ふ
とよみたりければ、いととあさからずぞ思はれる。薩摩守^{さまのかみ}、忠教^{ただり}の母是なり。似るを友とかやの風情^{ふうせい}に、忠盛もすいたりければ、彼女房も優なりけり。

（巻第一、鱸）

忠盛が豊明節会に天皇の前で舞をし、殿上人たちにかからわれたのと同様、女房のもとに通っていた忠盛の忘れた扇を材料として同僚女房たちがからかった時に、忠盛が好いていた女房が詠んだ和歌が「雲井より」の和歌である。「雲井」に雲間と宮中を、「ただもり」に「ただ洩り」と「忠盛」を懸け、月の縁語として「おほろけ」を提示する。月が一首を支える語として機能しながら、忠盛の来たことを「言はじと思ふ」と詠みつつ、表白したものである。下句は陰微な表現をとりつつ来訪者の男性の名を明確に示す。王朝和歌にはない、集団を意識してみずからの意志を表明する新しい和歌であるといえよう。言葉の明確な輪郭表現で意志表示を行っているのが右の女房の和歌である⁽³⁾。

和歌をもつて傍らの殿上人、同僚女房たちのからかいに対抗し、振り払う和歌が二首記されている。鳥羽院の御感の語、女房の「雲井」（皇居）の語には院や天皇を拠点とすることで二首の和歌は忠盛、その女房を嘲笑することを許さない「政略的」和歌ともなっている。

この女房を母として、平家物語のなかでも有名な歌人が薩摩守忠教である。「忠教都落」（巻第七）で平家物語読者に愛される忠教は忠盛の六男、清盛の末弟である。その忠教が登場する章段が「富士川」（巻第五）である。

薩摩守忠教は、年来ある宮腹^{みやはら}の女房のもとへ通はれるが、或時^{あるとき}おはしたりけるに、其女房のもとへ、やんごとなき女房まらうとにきたッて、や、久しう物がたりし給ふ。さよもはるかにふけゆくまでに、まらうと帰り給はず。忠教^{ただり}軒^{のり}ばにしばしやすらひて、扇をあらくつかはれければ、宮腹の女房、「野もせにすだく虫のねよ」と儼^{げん}にやさしう口ずさみ給へば、薩摩守やがて扇をつかひやみて帰られけり。其後又おはしたりけるに、宮腹の女房、「さても一日、なにとて扇をばつかひやみしぞや」とはれければ、「いさかしかましなご聞え候ひしかば、さてこそつかひやみ候しか」とぞの給ひける。

（巻第五、富士川）

忠教と女房との和歌説話は先の、父忠盛と忠教の母ともなる女房との和歌説話との類似をうかが

わせる点がいくつか指摘できよう。①忠盛が上皇の御所にいた女房に通っていたこと、子の忠教が皇女の子である女房のもとに通っていたこと、忠盛、忠教父子はともに皇室にゆかりの女房のもとに通っていた。②忠盛が女房の所に扇を忘れたように、子の忠教も女房の所で扇を使用している。③宮腹の女房が「虫の音にことよせて扇の音のやかましいことをほのめかすとともに、忠^マ度^マに会いたい思いを抑えていることを、それとなく示したもの^⑨」(圈点、大洋付記)が示すように、ほのめかし表現を用いながら、自分の思いを表白する和歌の技法は忠盛最愛の女房と同巧である。④忠盛の通う女房が「優なりけり」と評されたように、忠盛の通う宮腹の女房も「優にやさしう」と評される。

以上、四点で指摘したような類似が忠盛と子の忠教の和歌説話に見られる。扇に関わる逸話を持つ女性が悲劇に会うとは源氏物語に示される所である^⑩が、この宮腹の女性も忠教と別れることになる。富士川の戦さに忠教が出陣するためである。

かの女房のもとより、忠教のもとへ小袖^{ひとをたは}を一重つかはすとて、ちさとのなごりのかなしさに、
一首の歌をぞおくれける。

あづまの草葉をわけん袖よりもたゝぬたもの露ぞこぼるゝ

薩摩守返事には

わかれ路をなにかなげかんこえてゆく関もむかしの跡とおもへば

「関も昔の跡」とよめる事は、平^{へい}将^{やう}軍^{ぐん}貞^{せい}盛^{せい}、将^{やう}門^{もん}追^お討^{うち}のために、東^ま国^{くに}へ下^{くだ}向^{むか}せし事を思ひいでて、よみたりけるにや。いとやさしうぞ聞えし。

(巻第五、富士川)

東路に赴く忠教との別れの悲しみを「たたぬ」(立たぬ、裁たぬ)の語に込めた女房の和歌への、忠教の返事は、かつて平氏の先祖貞盛が朝敵である将門を討った戦勝の跡地だから嘆くには及ばない、と言う。女房と別れて都を立つ忠教は恋の絆に翻弄される男性ではなく、朝敵を討った先祖に連なる武人として定位されている。

かつて父忠盛がはるかな明石の浦の和歌をもつて鳥羽院の御感を得た逸話同様、子の忠教も朝敵源氏を打倒すべく東の国に向けて出京する。巻第五の富士川でも平氏は官軍であり、都から遙か遠くの辺境の地、伊豆に旗上げた頼朝の源氏は朝敵に他ならない。平家物語は忠教の和歌に「いとやさしうぞ」と評価を与えたのち、朝敵平定に向かった先例を列挙するが、その後半部に平氏一門の運命を予告するような表現があることは注意されてよからう。

いにしへ朝敵をほろぼさんとて都を出づる將軍は、三^{みつ}の存知あり。切刀を給はる日、家をわすれ、家を出づるとて妻子をわすれ、戦場にして敵に戦ふ時、身をわする。されば今の平氏の大將維盛・忠教も、定^{さだ}てかやうの事をば存知せられたりけん。あはれなりし事共^{ともども}也。

(巻第五、富士川)

切刀、すなわち「節刀。反乱鎮定に向う將軍に天皇より指揮権のしるしとして賜る刀^⑪」に象徴される天皇の軍勢として三つの心得をわきまえている大將軍の維盛と副將軍の忠教。しかし、維盛は

のちに平家物語が「維盛都落」（巻第七）以下、「維盛入水」（巻第十）で描くように都の妻子を片時も忘れることができず、屋島の戦陣を離れ、高野に登り、熊野那智の海で善知識により入水する人物であった。

朝敵を滅ぼすべく東国に向かう官軍の維盛と忠教の運命を予告するように、朝敵に向かう心得を二人に重ね、「あはれなりし事どもなり」と評する。この評語は朝敵打倒に勇む維盛、忠教に向けて、その役割もさることながら、家、妻子、そしてわが身さえ忘れる心の在り方に向けて発せられたものである。朝敵を討つ目的を大前提としながら、平家物語は、家、妻子、わが身さえ捨てる「行動」に共感している。朝敵打倒という目的は、家や妻子やわが身という「家族」の前に相対化されている。即ち、維盛の戦線離脱の旅が示すように、家族への思いを忘れることがないことを詳しく語ることで、平家作者の構想を裏切っている。天皇の印としての切刀に象られる権威や朝敵打倒という目的を越えて、家や家族、わが身との葛藤に生きる姿を平家物語は語るのである。天皇の命令に平家の人々はどのように生きようとするのか。それは武力による朝敵打倒という戦さ語りとしての平家物語とは別に、天皇の命令による和歌集撰集作業にもあらわれてくる。

四 忠教都落

よく知られている「忠教都落」の章段を引く。

薩摩守忠教は、いづくよりやかへられたりけん、侍五騎、童一人、わが身ともに七騎取つて返し、五条の三位俊成卿の宿所におはして見給へば、門戸をとちて開かず。「忠教」と名のり給へば、「おちうと帰りきたり」とて、その内さわざあへり。薩摩守馬よりおり、みずからたからかに結けるは、「別の子細候はず、三位殿に申すべき事あつて、忠教がかへりまゐつて候。門をひらかれずとも、此きはまで立よらせ給へ」との給へば俊成卿、「さる事あるらん。其人ならばくるしかるまじ。入れ申せ」とて、門をあけて対面あり。事の体、何となう哀也。

（巻第七、忠教都落、一章）

「忠教都落」は、「主上都落」を第一として、「維盛都落」、「聖主臨幸」に続く章段である。天皇が都を離れ、平家嫡流の維盛も都落ちをしたのち、忠教はわずかな手勢を伴つて都に戻る。それは、帝とも平氏一族とも行動を共にしないことで一族の論理に反する行為である。その行為が勅撰集入首を俊成に祈願するためとは後に知られるところだが、忠教の行動に俊成の宿所の内側はうろたえる。「いづくよりやかへられたりけん」は端的にそれを伝えている。「いづく」は都落ち以後、流離する平氏の不安を示す言葉である。たとえば、次の文章にその事はあらわれている。

ゆくへも知らぬ旅の空にて、憂き目を見せ奉らんもうたてかるべし。其上、今度は用意も候はず。いづくの浦にも心やすう落ついたらば、それよりしてこそ迎へに人をもたてまつらめ」とて思ひきつてぞた、れる。中門の廊に出て鎧とつて着、馬ひきよせさせ既に乘らんとし給へば、若公・姫君はしり出でて、父の鎧の袖、草摺に取つき、「是はさればいづちへとてわた

らせ給ふぞ。我も参らん、われもゆかん」とめんくにしたひなき給ふ…

(巻第七、維盛都落)

維盛の都落ちに際して、維盛と子供たちとの別れの愁嘆の場である。両者の会話の中心をなすのは「ゆくへ」、「いづく」、「いづち」の言葉である。都を離れて一体どこへ行くのか、その不安と動揺をこれらの言葉は余す所なく伝え、以下この言葉は西海を流離する平氏の人々の心情を象るものとして物語に多用されることとなる。

俊成宿所の動揺とは、西海を漂泊し、どこにいてもしれぬ平家の武將があらわれる予想外の事態によるものである。「いづく」、「いづち」ともしれぬ辺境に追いやられたはずの平家の一門、なかでも富士川、北国下向に副將軍、大將軍として出兵した忠教の都歸りは、驚嘆に値することであつた。

薩摩守忠教は馬からおり、みずから高声に俊成邸の内に向けて声を発する。下馬は俊成卿への恭順の意を、高声は武人としての彼の胆力に随順する表現ともなつていよう。「宣ひけるは」：「宣へば」の語りを意識した表現も和歌の師である俊成への忠教の敬意を示すものとして以後、一貫して使用されることとなる。俊成と忠教との対面に平家作者は「何となう哀也」と評していた。それは「富士川」で付された「あはれなりし事共也」に重層する世界である。ともあれ、傍線を付した忠教の敬語と応待する俊成の敬語「入れ申せ」は符合しつつ、両者の紐帯を形成してゆく。古来、この章段が愛され続けたのは師と弟子の境位を越えた両者の思いの深さにあろう。それを象つたひとつが敬語の連鎖（傍線部）であり、師の俊成への思い、勅撰集入首への思いは以後の忠教の長い言葉として平家物語に記されることとなる。

薩摩守の給ひけるは、「年来申承つて後、おろかならぬ御事に思ひまゐらせ候へ共、この二三年は京都のさわぎ、国々のみだれ、併当家の身の上の事にて候間、疎略を存ぜずといへども、常に参りよる事も候はず、君既に都を出させ給ひぬ。一門の運命はや尽き候ぬ。撰集のあるべき由承候ひしかば、生涯の面目に、一言なり共、御恩をかうぶらうと存じて候しに、やがて世のみだれ出てきて、其沙汰なく候条、ただ一身の嘆と存る候。世しづまり候なば、勅撰の御沙汰候はんずらむ。是に候巻物のうちに、さりぬべきもの候はば、一言なりとも御恩を蒙つて、草の陰にてもうれしと存候はば、遠き御まもりでこそ候はんずれ」とて、日比説おかれたる歌共のなかに、秀歌とおぼしきを百余首書あつめられたる巻物を、今はとてうツた、れる時、是をとつてもたれたりしが、鎧のひきあはせより取出でて、俊成卿に奉る。

(巻第七、忠教都落、二章)

傍線部で示したように、敬語の多用は俊成に対する弟子忠教の敬意を余す所なく伝えているが、注目される言葉は「一門の運命はや尽き候ぬ」であろう。平氏一族の滅亡を明確に示すこともさりながら、引き続き「世しづまり候なば」と、平氏滅亡以後の時間を言いとめている点である。いわば、滅亡確定の事態以前に運命をはつきりと捕らえ、滅亡以後をも見通す人物として忠教は造型されている。そしてつとも注目すべきは「草の陰にてもうれしと存候はば、遠き御まもりでこそ候

はんずれ」の言葉である。現世から死語の世界を遥かに想像し、極楽浄土に生まれることを願う通常の平家物語の行き方―たとえば「祇王」（巻第一）、「小宰相」（巻第九）―とは異なり、彼岸、死者の側から此岸、生者の側への眼差しをもって歌の師である俊成を守護しよう、と述べるのである。勅撰集への入首というこの世の願望を越えるものとして死者の論理が言葉の基盤に置かれている。

忠教は、「一門の運命はや尽き候ぬ」「世しづまり候なば」そして「草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御まもりでこそ候はんずれ」の言葉が示すように一貫して死に思いを寄せる人物として描かれている。

死をすでに覚悟し、自分の死後、靈魂となり、俊成の身を護る、との忠教の言葉に俊成は次のように応えている。

三位是をあけて見て、「かゝる忘れがたみを給おき候ぬる上は、ゆめく疎略を存ずまじう候。御疑あるべからず。さても唯今の御わたりこそ、情もすぐれてふかう、哀もことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ」との給へば

（巻第七 忠教都落、三章）

第一に「忘れがたみ」の言葉が明らかにするように、俊成も、死を自覚している忠教の言葉を率直に受け入れている。第二は「ゆめく疎略を存ずまじう候」の言葉である。これは忠教が俊成に以前述べた言葉「疎略を存ぜずといへども」に照応するものである。師の俊成をないがしろに思っていない、との忠教の言葉を受けとめる証として俊成も同様の言葉で応える。和歌における贈答の際の仕来りが、死を意識する二人の場面で行われているのだ。第三は「情もすぐれてふかう、哀もことに思ひ知られて」の言葉である。後半の「哀」は平家物語の編者の語り口として多用される言葉であり、事実、二人の対面に対して以前、「事となう哀也」、すべてが趣き深いと編者は述べていたが、それに照応しながらここでは俊成の言葉に移し変えられ、肉体化された言葉に変化、深められていると言えよう。俊成自身に忠教の言葉「疎略を存ぜず」が憑依することで両者の思いがリアリティーあるものとして現前化されてゆく。さらに「感涙おさへがたう候へ」も平家物語の常套表現でありながら俊成自身の言葉とされることで二人の対面が朝敵と天皇側―勅撰集の撰者としての地位―を越える境位へと押し上げられている。それを支えるのが、忠教と俊成双方による敬語の使用と、相手の言葉に即応しての和歌的作法、「涙」という歌語に拠るものであった。

敵と味方という軍事上の差異を越える表現に平家物語作者の見方があることは「那須与一」（巻第十一）に端的に表れるが、¹¹²「忠教都落」は幾重にも渡る二人の言葉の表現の類似、思いの通達性によつて読者に永く愛され続けたと思われる。

俊成の言葉を受けて忠教の言葉は情愛の場面から一転、次のように語り出される。

薩摩守悦んで、「今は西海の浪の底にもしづまは沈め、山野にかはねをさらさばさらせ。浮世に思ひおく事候はず。さらばいとま申て」とて、馬にうち乗り、甲の緒をしめ、西をさいてぞあゆませ給ふ。三位うしろを遥に見おくつて、たゝれたれば、忠教の声とおほしくて、「前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳」とたからかに口ずさみ給へば、俊成卿、いと名残をしようおぼえて、涙をおさへてぞ入給ふ。

（巻第七、忠教都落、四章）

勅撰和歌集入首への確約の言葉を受けて、忠教は歌人から武士へと変容する。西海と山野の対句仕立てに死に端然と立ち向かう忠教の覚悟が流露する。それは都落ち以後、西海を流離する平氏の人々を哀感をもって語る物語の行き方とは一線を画する武人像である。和歌への深い執心から一転して戦いと浮世を断ち切った清澄な心境に忠教は変容する。「馬にうち乗り、甲の緒をしめ」は彼の行動を表すと同時に、戦いの場へ転身する忠教の決意を示す言葉であった。それは俊成邸訪問時の「薩摩守馬よりおり」に対応する詞句である。続く「たからかに口ずさみ給へば」も訪問時に「みづからたからかにの給けるは」に対応している。いわば、和歌と武道に心を懸けた忠教の姿は発言の前と後に同じ言葉を重ねる語りの作法―「の給けるは」∴「との給へば」―を越えて忠教の発言を鮮明にしているだけでなく、訪問時と辞去の折りに同様の言葉を以て首尾照応する戯曲的構成によって「忠教都落」を鮮明な舞台劇としている。

確認的に言えば、忠教の訪問と辞去の際に下馬と乗馬が、高らかな声として二人の対面の場を包み、俊成と忠教の対話が先に述べたように類似の言葉を双方が用いることで交流を果たす「入れ籠」型の構造になっているのである。俊成の「名残おしうおぼえて、涙をおさへてぞ」の言葉も忠教を賞揚するものとなっている。

五 忠教の和歌の達成

其後、世しづまって、千載集を撰ぜられけるに、忠教のありしあり様、言ひおきしことの葉、今更思ひ出でて哀也ければ、彼巻物のうちに、さりぬべき歌いくらもありけれ共、勅勸の人なれば、名字をばあらはされず、故郷花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、「諸人知らず」と入れられる。

さ々なみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな

其身、朝敵となりにし上は、子細に及ばずと言ひながら、うらめしかりし事ども也。

(巻第七、忠教都落、末尾)

文章は平家滅亡以後の「世しづまって」から始められる。通時的時間に添って或る場面を限定的に口述する平家物語の語り口からすると、右の文章は忠教、俊成再会の後日譚とでも呼ぶべき様相を示している。

注目されるのは、忠教と俊成の再会の場面がもう一度思い出される点である。忠教は俊成によってその様子と言葉を思い出されることで復元され、「哀也」の言葉を与えられる。俊成邸訪問の折りは語り手によって、二度目は俊成自身の発言として、そして三度目は俊成に同化した語り手の言葉として「哀也」の言葉は登場する。さらに言えば「巻物のうちに、さりぬべき歌」の表現も以前忠教の言葉に「是に候巻物のうちに、さりぬべきもの」を踏襲したもの言いとなっている。今は死者となった忠教の生前の言葉を再度語ることで死者となった忠教は復元され、「生者」としてよみがえってくる。

「故郷花」という題も象徴的だ。都から西海へ落ちのびた平氏の人々の心を絶えず占めていたのが、

故郷の都であつたからだ。

ふるさとをやけ野の原にかへりみですゑもけぶりのなみちをぞゆく

まことに故郷をば一片の煙塵に隔つゝ、前途万里の雲路におもむかれけん、人びとの心のうち、おしはかられて哀也。

(巻第七、一門都落)

九月十三夜は名をえたる月なれども、其夜は宮ごを思ひ出づる涙に、我からくもりてさやかならず、九重の雲のうへ、久方の月に思ひをのべしたぐひも、今の様におぼえて、薩摩守忠教、

月を見しこそこのよひの友のみや宮ごにわれをおもひいつらむ

(巻第八、緒環)

清風はだへををかし、翠黛・紅顔の色やうくおとろへ、蒼波眼穿て外都望郷の涙おさへ離し。

(巻第八、太宰府落)

一門都落ちに際して焼け野原と化した故郷の都を振り返る修理大夫経盛の和歌が右の「一門都落」である。そして筑紫に落ちた平氏の人々が九月十三夜の名月を見て思い出すのは都でながめた月にはかならない。忠教は都の語を和歌の中核として去年と今宵を一元化した時間と捕らえ、友のみが自分を思い出しているのであろう、と述懐する。故郷の都は月とともに在り、月を見ることで遠く離れている友と自分が結ばれている。ふるさとである都は遠く筑紫の地まで漂泊した忠教を都に繋ぎとめる歌語であつた。

さらに「太宰府落」では、四国の海を漂う女房たちの容顔の衰えから、望郷の涙の押さえがたいことを詳しく語っている。わが身の運命とは西海流離の悲しみと同時に、ふるさとである都から切り離されたことへの落胆であつた。

都落ち以後の平氏の人々の都、ふるさとへの絶えることのない思いを考へるなら、都落ちに際して忠教が「故郷花」の題で和歌を詠み、それを俊成が多くの和歌のなかから撰歌した意味は極めて大きい。つまり、忠教の和歌は都落ち以後の平氏一門、それに連なる人々の故郷への思いを都落ち以前に見通していた和歌だと思われるのである。平家物語は繰り返し、運命といい、予見、予測に言及するが、「故郷花」の題で和歌を詠み、平氏一門滅亡後に勅撰集の和歌として残したい、との忠教の願いと、それに応えた俊成の撰歌はふるさとへの平氏の人びとの思いを都落ち以前、あるいは平氏滅亡以後に確かな表現として、勅撰の名譽に浴するものとして詠まれ、文字化されたことになろう。

忠教の和歌はふるすとは都であり、その荒廃を詠みながら下句は「むかしながらの山ざくらかな」と詠む。昔という「過去」の時間と今という時間が「長等山」という歌枕の示す時間と空間の不変を意味する懸詞によつて結ばれている。むかしと長等山が統合することで、むかしは過去の時間に封じこめられるのではなく、現在の時間、空間にも繋がる時空として捕らえられている。昔と今とが融合する不変の時空と変わることのない桜とが一首の和歌によつて歌いとめられている。散ることへの思いに惑乱する古今和歌集春下の諸歌^③を思へば、忠教の桜は長等山という歌枕を基盤とすることで変わることのない美の発現として王朝の勅撰集和歌とも一線を画するものであつた。

西海流離の平氏の人々の思いの積もり、故郷の都への執心と嘆きに照らし合わせるならば、人々の「思い」をすくいとり一首であらう。栄華を極めた都はすでになく、都に戻れる目途もない「都

落」以後から反転するように、忠教の和歌は自然の変わらぬ様子、長等山を桜によって平氏の人々の嘆きを昇化、鎮めるものとなっている。編年的、通時的な枠組を豊守する平家物語の構想は堅持しつつも、「世しづまって」のち、忠教死後に忠教生前の和歌が披露されることで現世の時間は逆流し、今は死者となった忠教の和歌が、滅亡した平氏一門の人々の思いを慰撫、鎮魂するものとして語られている。その点で注目されるのは章段末尾の平家物語の語り手の批評である。朝敵である以上、勅撰和歌集に作者名を表記されないことは至当とはしながら「うらめしかりし事ども也」と締め括っている。朝敵を滅ぼすことが物語の枠組みとしてありながら、朝敵であることが相対化され、批判の対象と化している。勅撰和歌集という天皇の権威を体現するものに朝敵の忠教の和歌が入首する。その「矛盾」を突く形で平家物語の語り手の言葉「うらめしかりし」が章段を結ぶ。

時間の流れに随順する編年体という形、朝敵を滅ぼすとの内容上の構想を相対化し、昔を今に反転させ、慰撫するものとして忠教の和歌はある。

さらに言えば、源氏と平氏の抗争、朝敵と官軍という縮図そのものを相対化してしまうものとして「むかしながらの山ざくら」はある。人の世の営み、時間を無為化して、悠久の時間と空間へと忠教の和歌は突きぬけている。無常が物語進行の論理としてあるとすれば、変わらないものとして和歌の下句「むかしながらの山ざくら」があるのである。栄華を極めた平氏一門が源氏の軍勢、朝敵の汚名によって敗退してゆく物語が平家作者の構想としてあるとすれば、政治や権威とは無縁の不変なる世界を忠教の和歌は表現しているのである。

浮世の抗争、転変のなかで嗟嘆する西海流離の物語は、木曾義仲になり変わっての頼朝軍の都進攻を経て、平氏の人々の死を列挙してゆく。生田の森で大將軍として源範頼の軍勢と対戦する平知盛、一方、山の手侍大將として派遣された越中前司盛俊も猪俣の小平太則綱によって討死する(巻第九、「越中前司最期」)。続いて「忠教最期」、「重衡生捕」、「敦盛最期」、「知章最期」、「落足」章段における越前三位通盛の最期、通盛の妻の入水語る「小宰相身投」と、巻第九は主なる平氏の武人、その妻の死者列伝の様相を呈している。では次に、「忠教都落」の和歌の世界に関連して「忠教最期」の和歌を論じる。

六 夕闇の桜

薩摩守忠教は、一の谷の西手の大將軍にておはしける(中略)六野太が重おくればせに馳来^もッて、うち刀を抜き、薩摩守の右のかひなを、ひぢのもとよりふつときり落す。今はかうと思はれけん、「しばしのけ、十念唱へん」とて、六野太をつかうで巨^{おほ}だけはかりなげのけられたり。其後西にむかひ、高^{たか}声に十念唱へ、「光明遍照十方世界、念^{ねん}仏衆生^{ぶつしやう}撰^{せん}取^と不捨^{ふしや}」とのたまひもはてねば、六野太うしろよりよつて、薩摩守の頸^{くび}を討つ。よい大將軍討ッたりと思ひけれども、名をば誰とも知らざりけるに、えびらにむすび付^つられたる文をといて見れば、「旅^り宿^{しゆく}花^{はな}」といふ題にて、一首の歌をぞよまれたる。

ゆきくれて木のしたかげをやどとせば花やこよひのあるじならまし

忠教」とか、れたりけるにこそ、薩摩守とは知りてしげれ。

(巻第九、忠教最期)

「忠教都落」の風雅の場面とは一転して、忠教は右腕を肘の元から切り落とされることで死を覚悟する。六野太との壮絶な戦闘場面、死を覚悟しての極楽浄土に生まれることを願う経文の一句は軍記物語、極楽往生を勧める仏教文学としての姿をよく伝えているが、注目されるのは「高声に」の言葉であらう。先の「忠教都落」(巻第七)で俊成邸の訪問の際と辞去の際に「たからかに」高唱する姿と通底する「声」の武人として忠教は造型されているのである。

また、討たれる時も名が誰ともわからず、和歌と共に記載されてあった忠教の名ではじめてその人と知られるのであった。和歌によつてはじめてその名が周知される仕儀は先の「忠教都落」の勅撰集に和歌が採られる顛末の物語と共通する点がかがえるであらう。現世にある時、人々からは大將軍として認知されていた忠教は死んだのち、和歌によつてはじめてその内面世界が明らかにされる。生きている時間もその人の時間であるが、死後になって和歌が披露されることで死者は和歌とともに生者のように蘇る。死者でありながら和歌の現在性によつて「再生」するのである。

忠教の和歌の題名「旅宿花」も興味深い。かの千載和歌集に入首した歌の題は、「故郷花」であった。同じ桜花が忠教の心を占めていたことが知られる。その歌は戦いの日暮れ、心の行き場をも失って桜の木陰を一夜の宿とする折りがあるならば、桜の花が私を迎える主としてもてなしをしてくれるだろう、と詠む。戦いの事はすでにない。現世の生死、生から死への往生の思想もない。あるのは夕闇にしらじらと咲く桜ばかり。それが眼いっぱい広がる。戦さにおける生死、往生の思想を説く物語の論理を越えて、自然そのものと深く交差する無垢な魂が和歌から発現する。自分がどのような場所で、どんな思いで死ぬかも不明である。その行く方もしれぬ自分の最期はこのようであらう、と忠教は死の際の自分の在り方を見通して和歌を詠んでいる。生きていながら死にゆく自分の未来が桜の花と共にあることを想像している。自然の花と交差するわが姿を幻視することで戦さの現実を突き抜けてゆく。末期の眼に映る夕闇の桜、それが自分を迎え入れると詠むことで忠教の和歌は現世の論理、生から死へ、あるいは死から生への論理を越えているのである。

注(1) 本文ならびに巻、章段名は梶原正昭氏、山下宏明氏校注『平家物語』岩波文庫本に拠る。
以下同じ。

(2) 伊藤博氏校注『万葉集』上巻角川文庫本に拠る。

(3) 佐伯梅友氏校注『古今和歌集』岩波文庫に拠る。

(4) 阿部秋生氏、秋山虔氏、今井源衛氏、鈴木日出男氏校注『源氏物語』②新編日本古典文学全集、二四七頁。

(5) 注(4) 同書、二四七頁。

(6) 注(4) 同書、二五七頁。

(7) 幾内、幾外、竜宮城については兵藤裕己氏『平家物語の読み方』ちくま学芸文庫が詳しい。

(8) ただもりを詠みこむ和歌には白河院の御製「夜なきすとたゞもりたてよ末の代にきよくさかふることこそあれ」(巻第六「祇園女御」)もある。

- (9) 『平家物語』(二) 二〇七頁の左注一四に拠る。
- (10) 秋山虔氏編『王朝語辞典』の「あふぎ扇」の項、下段「不幸な展開をみるところが興味深い」二二頁、藤本宗利氏担当。
- (11) 『平家物語』(二) 二〇九頁の左注五に拠る。
- (12) 奥^{おく}には平家、ふなばたをたゝいて感じたり。陸^{りく}には源氏、えびらをたゝいてどよめきけり」『平家物語』(四) 一六八頁。
- (13) 有名な和歌を引けば「久方のひかりのどけき春の日に しづ心なく花のちるらむ」(古今和歌集八四番歌)、「春風は花のあたりをよぎてふけ 心づからやうつろふと見ん」(同・八五番歌)